

禅の世界思想史的位置づけ

中 村 元

ただいま禅研究所所長の田島先生よりまことにご丁重なご紹介をいただき恐縮に存じます。先般、わたくしにお話がございまして、こちらの禅研究所の講演会に参上するようとのご依頼がありました。そこで何を申し上げたらよいのかお伺いしましたところ、やはり禅研究所のことだから禅についてということでした。しかし禅のご本家でわたくしなどが禅について何かをお話するのはまことにおこましいこととして、それこそ釈迦に説法ですから、そこでわたくしが比較的に専門としておりますインドの方から禅に関して気付きましたことを申し上げることにさせていただきます。それによつて禅の思想史における位置づけというものを明らかにしていただくご参考になればと思う次第であります。したがつて禅のご専門の方々の前で申し上げられるようなことは何もございませんが、その点懇しからずご諒承いただきまして暫くご静聴下さいますようお願いいたします。

禅の伝統は釈尊に始まるものであります、現実に禅の文化というものが現われてきたのは、歴史的・社会的な事情に促されたと申しましようか、それに呼応して出てきたのであります。達摩大師によつて禅が支那に伝えられたのであります、それから発展していくた過程というものを考えてみますと、それはユーラシア大陸における一つの大いな転換期といいますか変革の時代に現わたるものといえるでしょう。つまり、それは古代帝国が崩壊していくたその波に呼応して出てきたのであります。西洋では古代ローマ帝国が蛮族に荒らされて崩壊し中世の社会が成立いたし

禅の世界思想的位置づけ（中村）

ます。するとキリスト教が広まっていき僧院というものが作られてきました。シナでは漢の大帝国が崩壊してその後に蛮族が侵入して参ります。歴史で五胡十六国の乱などといつてゐるのですが、その後に禅宗が盛んになつてきています。インドについてもそれと同じ変化がほぼ同じ時代に現われています。つまり、ユーラシア大陸の中央部で大きい民族移動が行なわれたのです。西の方に行つた連中はアッチラ (Attila 五世紀) の行動にみえますように、ローマに侵入して荒し廻り古い文化を破壊したわけです。インドについて申しますと、同じように中央アジアの蛮族がインドに侵入いたします。そしてグプタ王朝の偉大な帝国を崩壊させますと、その優雅な文化がここに消滅するのであります。インドに入つた蛮族はサンスクリットでフーナ (Hūna) といいます。東洋史でいう匈奴のことです。あのハンガリーという国がありましょーーあのハンガリーの「ハン」と同じなのです。中央アジアで蛮族がちょっと動くところの蛮族が押されてまた動くといった具合に、それぞれプッシュされながら民族移動をしていったのです。最後にこの匈奴がアーチラなどによってローマに侵入し、一方ではインドに入つてきてグプタ王朝を崩壊させたのです。このように統一国家としてのインドは消滅します。それからイスラームの軍隊が入つてきてインドを統一するまでの五・六百年の間はインドは四分五裂の状態になるのであります。フーナの王様が非常に凶暴であったことは、ラージャタランギニー (Rājatarangini) という歴史の書物の中に、いろいろ誇張はございましょーが、記されております。例えば、トーラマーナ (Toramāṇa) という匈奴の王様は野蛮の限りを尽したそうです。匈奴の軍隊が攻めてくることは鳥の鳴き声で分るといわれています。匈奴の軍隊が通つた後は屍骸が山をなして、それに鳥が群がり啄むのです。だから鳥が寄つてくるのを見ればフーナの軍隊がやつてくるのが分るというのです。またその王様は変な趣味がありました。象を高い崖の上から蹴落とすと象が悲鳴を上げる。その声を聞いて楽しむというのがかれの趣味だったのです。そんくらいですからインドを荒したのは当然のことです。そんな蛮族がお隣りのシナにも侵入して散々荒し廻りました。そ

れは皆様が東洋史でお聞き及びの通りであります。このように古代帝国が崩壊いたしますと古い宗教の伝統も跡絶えてしまします。ことにシナの場合には古い時代すなわち隋、唐の教学というものが一度跡絶えてしまひ經典も無くなつてしまします。仏教の学問が衰えてくるのであります。そこで經典に頼らない仏教、文字に捉われないで仏教の真義をじかに摑むことによつて自身で実践するという形の仏教が現われて参りました。それが禪だったのですね。インドのグプタ王朝の崩壊期、大体五世紀の終りから六世紀の始めにかけての時期に、達摩大師はシナに禪を伝えられたのであります。わたくしはいま「シナ」ということばを使いましたが、この点につきましてご了承いただきたいと思いますが、わたくしは中華民国の方や中華人民共和国の方に対しても中国とか中華ということばを使いますが、それはどこまでも外交的、社交的な意味で使うのです。学問的な意味ではわたくしは中国ということばを使いません。その理由は、中国といふのはまん中の国ということですが、仏典の中で中国ということばがでてくる場合には、シナのことではなくガンデス河の流域のことを指しています。法顯三藏（五世紀）の旅行記—法顯傳または仏國記といふますが一をみると、ガンデス河流域のことを中国と書いています。では自分の国のことと何といつてあるかと申しますと、漢土辺地と書いて、漢民族の辺地つまり片寄つた所にある土地といつています。全くインド一辺倒だったのですね。インドはお釈迦様の国であり「中国」と考へていたわけです。要するに、法顯は仏典の用法を保つっていたわけです。もちろん後になりますとシナ人の間で中華意識が強まり、中国とか中華ということばを自分の国に対して使うようになりました。けれども、中華人民共和国といった場合には異民族が含まれているわけです。例えば、チベット民族がおりましよう。このチベット人といふのは種族として、あるいは言語的にはシナに近いでしょう。しかし文化的にはインドに直結しています。また満州人などもとは別の民族でしょう。そういう異民族の存在といふものを文化的には認めざるを得ないので。だから漢民族の地域あるいはその文化的伝統に関しましては、わたくしはシナということばを使うのです。これは国名の「秦」からでたものです。西洋では“China”とか“Chine”とか申します。南アジア諸国では「チーン」と申します。サンスクリットでは「チーナ」（Cina）といひます。俗語では最

後の母音が落ちて、ヒンディー語でもセイロンのことばでも、南アジアでは大抵シナのことを「チーン」といいます。だから学問的には正確を期さなければならないからわたくしは「シナ」という言葉を使っていきます。この点」諒承を得たいと思います。

さて本題に返りまして、禅の文化が現われたということは、ユーラシア大陸における世界史的な大きな流れの中に出てきたことを意味します。それは西洋におけるキリスト教の確立、ことにその僧院の確立とちょうどパラレル（parallel）になっていきます。西洋ではその頃僧院モナスティリ（Monastery）が作られました。これを普通「修道院」と日本で訳しています。わたくしはこの間韓国に行きましたして大変面白ないとを発見いたしました。韓国・朝鮮で修道院と書いてありますと寺院の中の禅堂、坐禅を修する堂舎のことなのです。日本ではキリスト教の場合に用いますが、意味が違っているわけです。ところで禅は混乱期の中に広がった宗教ですから、少なくとも初期においては政治権力の保護というものは受けていません。あの達摩大師と梁の武帝（464—546）との対談——本当か嘘か知りませんが——が伝えられているでしょう。これは達摩大師が梁の王朝から何らの保護も受けていなかつたことを示しています。武帝は多くの塔や寺を建てたことを大変威張っていたわけでしょう。ところが大師はそれを無功德とやつたのです。このように禅宗は混乱期の中から広まつていったのです。いわば民族的な宗教として伸びていったわけです。そして最初のうちは禅僧はイティネラント（itinerant）つまり遍歴の修行僧として生きたのですが、ある時期から禅堂が作られるようになりました。共同生活を行なうようになつたのです。志を同じくするものが集まつて人里離れた所で共に住むようになつたのです。以前は放浪者の性格を禅はもつていたのですが、第四祖の道信（580—651）の頃から禅は偉大な生活の転換を行なつたわけであります。道信は隻峯山という山に籠り三十年間もそこに住み、ついに出ることがなかった。帝王の召しにも応じることなく、そしてかれの周りには常に五百人の僧が共にいたそうです。大勢の僧が共に一ヶ所に住むことはやがて制度化されるようになります。そこで僧たちの生活形態が変わつて参ります。人里離れた山間で僧院が作られたのです。そうすると村里に出て行乞をすることができなくなりますから

自然と僧たちは自給自足の生活を行なわなければならなくなつたのです。これは大きな転換であります。インドの生活を見ますと、修行者が共同で住むヴィハーラ (vihāra) というのは精舎と申しますが、あれは大都市または村落から遠からず近からざる所に建てることになつていきました。その理由は托鉢・乞食によつてお坊様は暮していますから、托鉢に行けなくなるからです。また市内の雜沓地域では修行の障りになります。そこで村落から遠からず近からざるといふいふになるのです。一見何でもないことですがなかなか意味があると思います。インドまたは東南アジアでは全部そういう形態をとっています。セイロンなどで僧院をもつようになりますと多少違つてきますがそれは後のことになります。ところが、シナの禅宗では道信以後山の中で共同生活をやるようになり、托鉢に行けないですから山中で自分たちだけの独立した生活をします。そこで自ら田を耕し木を切り家を建てるというようなことをお坊様がするようになります。ここでは僧侶が生産に従業し勤労を尊重することになります。申すまでもなくこれが禅門の作務です。この作務が南アジアの僧院にはありません。例えば今日でもタイランド、ビルマなどに大きな寺院があります。多くの僧侶が住んでいますが、勤労は全部俗人の寺男がやります。お坊様はただじつと坐禅を修するだけです。お坊様が勤労に従事することは戒律で禁止されているのです。これは恐らくジャイナ教あたりから承けているのだと思ひます。ところがシナの禅院では禅定を修することと並んで勤労と経済活動とが現われてきたのです。これは西洋の僧院の出現と丁度パラレルになつています。道信がでるちょっと前に西洋ではエデプト人であるパコミウス (292頃—346) という人が大凡四世紀の初めに最初のキリスト教の修道院を作りました。そして農業勤労に従事したのです。それ以前のキリスト教の行者は柱の上にじつと坐つて神を念じたり、荘の上に寝ころんで体から血を流したりする行者がたくさんいました。ところがパコミウスの頃から違つてきました。禅の方でも教団の生活規定ができるります。それがご承知の清規 ^{しんき} といふのです。百丈懷海禪師 (749—814) によって組織化されたものがとくに知られてゐます。一度これに対応するものとして西洋においては、イタリアの聖ベネディクト (Saint Benedict) が大凡五世紀の終りから六世紀にかけていくたの修道院を作つて規定を設けています。西洋の修道院の戒律もやはり勤労と生産に

関する問題を含んでいたのです。修道院で牛を飼いミルクを搾り草刈つたりしています。大体この頃から始まっていります。また修道院を作ったといふこともやはり歴史的な事情に由来しています。かれはイタリアに住んでいたのですが、蛮族が侵攻略奪してきた時のことを見た時に僧院を建てたのです。そこで人々は安らかな憩の場所を見出しました。そのようなもので有名なものは例のモンテ・カシノ(Monte Casino)として、年輩の方はご存知だと思いますが、第二次大戦の時にイタリアとナチスの軍隊がここに立て籠つたのではないか。連合軍の攻撃を蒙つて部分的に破壊されたと聞いています。とにかく要害の地なのですね。当時の世俗のありかたではもう駄目だということで自分たちだけの手で僧院を作ったのです。禅の僧院を作られた方々の語録について、わたくしは未だ結論を出すに至つていませんが、やはり世俗には様々なことがあるから自分たちだけの静かなやすらいと修行の場所を作りたいということでの僧院を建てられたのではないでしょうか。例えば証道歌などを読みますと実にすがすがしい心境が詠われていますね。また禅林では宗教上のお勤めの外に耕作・掃除などの作務が定められていますが、このような性格は西洋のモナステリと大変よく似ています。

キリスト教にはいろいろな流れがあり一様ではありません。修道院を訪れますとあまり装飾もなく簡素でひつそりとしています。ちょうど永平寺などの山の中の禅寺と同じです。カソリック寺院に参りますと聖者の像などがありますが、あれは仏教的表現をしますと西洋の真言密教ということになります。民衆的な感じがします。ところが奥に籠つて修行に勤める修道僧の生活は違います。民衆の宗教は東洋も西洋もほとんど同じです。聖者の像は仏教の菩薩の像に対応します。またお燈明を上げること、お線香をともすこと、香を焚いて身に薰することまで同じです。それからお珠数ですが、インドから西洋にもたらされたものです。西洋ではロザリオ(rosary)といいますが、その由来は分っています。サンスクリットでお珠数のことをジャパーマーラー(japamālā)といいます。ジャパとは念誦のことでマーラーというのは輪です。もとはパラモンが右手を持って神の名を唱えながら一つずつ爪繰つたのです。それが西洋に入つて「珠数つまぐ(to tell beads)」というような言葉ができるのです。ジャパーは念誦のことですが、

それがジャパーとなるとバラのことになるのです。アラビヤ人か西洋人かがお珠数をみてこれは何だと聞いたのですね。その時ジャパーはバラだ、マーラーは輪だといったのです。これからロザリオ（rosary）といふことばができるのです。また合掌の習慣ももとは西洋にはなかつたものです。キリスト教はユダヤ教から出たのですが、ユダヤ教の礼拝はラバイ（rabbi）と呼ばれ、ユダヤ教の坊様がテントを張つて天空を仰いで高らかに声を上げ手を拡げて行ないます。というのは沙漠の宗教ですから天を仰いで神を讃えるだけなのです。ところがヘレンズム世界にこの宗教が入つてきますと、ちょうどそこにはインドなど東方からの文化が伝えられていましたので、その影響を受けてカトリックなどはいつの間にか合掌を取り入れてしまったのです。これはみなインドないし東洋の影響なのです。このようにわれわれの間に残つてゐる儀礼が向うにあるわけなります。

いま申しましたのは民衆的な形態ですが、聖者たちは修道院の中で世俗から遠ざかつて静かな生活をしたのです。この点はシナの清規でもそうですし、永平清規を読みましても世俗から離れた生活が規定されています。ところが歴史的な流れをみていきますと、この寺院や修道院というものが或る時期になると、民衆に近づく傾向がみられます。世間の人は中世は一様だったとみていますが、決してそうではありません。中世自体の中に徐々に変化が現われてきています。それは東西ともに同じです。長い中世には変化・発展があります。その一つとして最初の修道院や寺院は深山幽谷にありましたが、それがだんだん町の人に近づいてきます。その転換をなす動きはわが国では瑠璃光寺（1268—1325）ハーロッパでいえばクリニー（Cluny）の修道院ということになるでしょう。能登の總持寺は交通は不便だったと思いますが門前町をもつていています。クリニーはフランス東部の小都市で、そこにはベネディクト会の修道院があつたのです。ところがそこでは手工業が行なわれていきました。クリニー・レースというものはそこから始まりました。ここを搖籃の地として修道院の改革運動が始まつて次第に拡がり、フランス国境を越えてイタリア・スペイン・イギリス・ドイツ・ポーランドに延びていきました。このようにしてキリスト教を奉ずるすべての国にその影響が及んでいきました。そこでクリニーの教団では世俗の兄弟とか外の兄弟とか呼ばれる仲間が作られています。瑠

禪の世界思想的位置づけ（中村）

山禅師の場合にも民衆に禪の感化が及ぶようになつてゐています。年代の上じゅうの画者は相應してゐるのです。インディアにて考えてみますと、これに対応するものはシヤンカラ (*Sankara* 700—750) と由来あるヒンドゥーの不二一元 (*advaita*) 謂のヴェーダーナタ (*Vedānta*) 学派でしょう。シヤンカラが道元禅師に対比されるべきはいわゆるのですが、瑩山禅師に対比される人をどうとおめてよいかよくは分らないが、ラーマーナムジヤ (*Rāmānuja*, 1017—1137) をあるいはもつてきてもよいのではないかと思ひます。もちろん、びつたりとは合わない点があります。ラーマースジャはシヤンカラを攻撃しましたが、瑩山禅師は道元禅師を非難されたことはありません。ソリで、まあいいじうようなり」とはいえるかも知れません。シヤンカラに由来する本山は深山幽谷の中にあるシユーリンケーリ (*Sṛingeri*) で、非常な山奥です。ちょうど高野山のような所です。途中はなかなか大変でして普通の人はとてもお参りもできな所です。ところがラーマースジャ系統のお寺があるのは南インドのマドラス (*Madras*) の近くにあるカーンチープラ (*Kāncipura*) という港町で、だれでもすぐお参りできる所です。つまりヴェーダーナタの哲学が民衆的になつたようなものなのです。瑩山禅師はこれに対比できると思ひます。シナの禅宗においても十三世紀に入つてから眞実の諷誦が行なわれるようになつた。大悲呪、楞嚴呪などが読まれるようになります。また俗信仰の傾向も顕著になつたようです。瑩山禅師の包容的態度に注目すれば、同時代のインドのヴィディヤーラニヤ (*Vidyāranya*) と対比できるかも知れません。かれは立派な聖地や無類の大寺院を建てています。シーリングリーの本山はヴィディヤーラニヤ以前にはほとんど何もなかつたのですが、かれの時に至つて大いに発展いたしました。田島柏堂先生の研究によつて明らかにされたことですが、瑩山禅師の門流の通幻寂靈禪師 (1322—1391) や実峯良秀禪師 (1360—1405) などは民衆のための活動をいろいろなされています。橋をかけ井戸を掘り灌漑事業を行ない民衆に利益をはかっておられます。瑩山禅師は禪僧の心得を述べておられますが、その中で明らかに世俗を肯定する立場を示しておいでになります。また、教義的にみますと正法眼藏には否定的表現が多いのですが、これはシヤンカラに似ています。シヤンカラはウパニシャッドの「そうでない。そうでない」 (*neti neti*) の思想を受け継いで、絶対者は結局」とはでは表現できな

いもので「そらでない」と否定的に「う外な」と主張しておられます。西洋では同時代にドイツを中心として神秘家が現われておる。エックハルト (Eckhart, 1260?—1327)、タウラー (Johann Tauler 1300頃—61)、ロイス・ブルーク (Jan van Ruys Brook, 1293—1381) など的人はシャンカラと非離はよばれておられます。エックハルトの文章をあるインド人の学者が一つ一つサンスクリットをあてはめていますが、まるでシャンカラの文章を読んでいるような感じがします。いのようなことが禅僧の場合にもいえぬと思ふます。西洋でも真理を否定的に表現する仕方は古くからあります。フレキサンティアのクレメンス (Clemens, 150頃—215頃) が否定の道といふとをいっています。また、著者不明ですが「テオロギア・ゲルマニカ (Theorogia Germanica)」という本がありますが、その中に否定的表現が続々と出ておまして道元禅師を思ふ趣をもつておられます。

さるに言語表現の面で注目すべき現象は、東西ともに古くからの古代国家の古典語を放棄していくことです。道元禪師以前の南都北嶺の「ゆゆしき学匠」たちの残したもののはすべて漢文でした。西洋ではラテン語で書かれたのであります。ところがそれに対する反逆が中世の神秘家によってなされました。かれらはゲルマンの言語を用いてキリスト教の真理と思うところを書き、同時に当時のカソリックのオーソドクスな教義からかなり外れたことを唱えています。エックハルトの教義は異端として弾圧を受けました。とにかくこのように民衆のことばであるドイツ語で書くことを始めたわけです。日本では平安末期から鎌倉にかけて仮名法語が現われ始めました。法然上人の一枚起請文、親鸞上人の和讃、それから道元禪師の正法眼藏などすべて和語で書かれています。インドでも大体この時代から南インドの聖者たちはサン스크リットでなくタミル語やテルグ語で多くの宗教詩を残しています。ベンガルにおけるサハジャ(sahaja)仏教というのがありますが、サハジャとは生まれつき仮性をもつていることを意味します。日本天台の本覚法門ということになります。このサハジャ仏教がベンガル語で伝えられています。もう少し後になると、ビソーバケーチャル(Visoba Khecar 一二三世紀末)・ラーマーナンダ(Rāmānanda 一四世紀末—一五世紀初)、カビール(Kabir 1440—1518)のような宗教詩人が出てきますが、これらの人々は意識的には古典語を捨てています。

す。シナについてはくつきりと線を引くことは難かしいのですがやはり変化はみられます。古い時代の禅と違った傾向が宋代以後現われてきます。宋代以前の禅宗はインドに直結しています。内容が論理的・体系的で、例えば達摩大師に帰せられる二入四行論をお読みになれば分るように実にインド的なのです。ところが宋代以後の禅宗は全然違います。抽象的用語は無くなり、民衆のことばで書かれていますから日本人には非常に読みづらいものになってしまいます。碧巌録や無門関を二入四行論と比較してみると全然違っています。このような語録が著されたのはゲルマンの神秘家や鎌倉新仏教の指導者と同時代です。インドの場合も同じでして、ヒンズーイズムでタントラ（Tantra）の宗教というのがありますが、シナの語録のような謎めいた表現が多く出てきます。

つぎに思想の面を考えてみると、禅の根本的立場は不立文字ということになりますが、禅宗ぐらい多くの書物を残している宗派も外にありません。では「不立文字」というのはどういうことかと申しますと、命題(proposition)の形では教えを説かないということです。固定のドグマを立てないから自由自在にいふひやむことばを用いるのです。直指人心というのは、真理をじかに捉える、自分で直接体験するのです。西洋でこれに近いものとしてはアンゲリウス・シレシウス (Angelus Silesius, 1624—1677) が挙げられます。かれは見性と同じことをいつているのです。「若しもキリストがベテレヘムに四回生まれたとしても、かれが汝の内に生まれないならば、汝の魂はやはり绝望的である。」カルコタの十字架は汝の魂を救わないであろう。汝自身の心の内の十字架のみが汝自身を完成することができる。」またさきに述べましたテオロギア・ゲルマニカの中では、「われであること、自己であること、またわがものといふことが、実は眞の実在からわれを疎外せむるものである」といっておます。この表現は全く仏教の無我説を思わせるものがあります。これはサンスクリットのペリニルヴリタ(pari-nir-vṛta)に当ります。禅家の身心脱落に対比できるといえます。また、わがものという観念が残っている限りは愛は実現しないところは大乗の菩薩の智慧と慈悲を思わせます。禅では自分の本性を徹見するために坐禅を修するわけです。西洋では冥想ですね。英語には“meditate”と“contemplate”といふことがあります。この違いはアメリカ人などに聞いてみますと、

“meditate”は心の働きを無くすから瞑想，“contemplate”は何か一つの対象をじっと覗き込むだといいます。印度のデイィーナ(dhyāna)の意味です。禅は印度から来たのです。この意味は「瞑想」というほどの意味です。印度一般の意味は、何かを心の中じっと思ひつめる」とです。後の禅の用語で申しますと有相の禅です。ところがシナに伝わった禅の見解では無念無想を目指すことが強調されます。道元禅師によりますと、無念無想になると、と思つてそれにしがみついてはまたいけない、妄想が起きたら妄想をしてそのままあらしめよというのです。またヨーガ(yoga)といふとばがあります。英語の“yoke”と語源的に同じとばです。一つのものに心を集中するところのが最初の意味だったのです。ヨーガ・スートラ(Yoga-sūtra)などになると「心の働きをなくす」と(citta-vṛtti-nirodha)が理想とわれぬようになります。仏陀の教えの四諦の中の滅はサンスクリットやパリ語やニローダ(nirodha)ともいわれます。これは心の乱れを制することです。心の抑制ができると煩惱は無くなりまことばを用います。「無」字の公案が後代の禅で重要視されました。西洋でもハックハルトも神は無であるといっています。禪で悟りをしばしば燈明に譬えますが、エックハルトも人間の靈魂のよりとも内的な本質を輝き(Funkel)と呼びます。究極の境地に至りますと、個人の作意でなく人間の内に行なわれる神の作為が顯われるのです。神は魂の内に本質を宿すところともいっています。道元禅師にもそのような教えがあります。正法眼藏生死の巻に「ただわが身をも心をも、はなぢわすれで、仏のいくになげいれて、仏のかたよりおこなわれて、これにしたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、いふるをもひひやせずして、生死をはなれ仏となる」とあります。つまり修行は初めは苦しいものですが、究極のところに至ると楽しいものになるのです。安息に満ちた光明となるのです。西洋ではイギリスの神秘家の中にそれをみることができます。「無知の雲(The Cloud of Unknown)」といふ書物が近ごろ注目されるようになりました。禅の修行について道元禅師の説かれたいとが「無知の雲」と非常によく似ています。イギリスというと経験論の哲学だけしか知られていないのですが神秘主義の宗教家もいたわけです。アンゲリウス・シレ

禅の世界思想的位置づけ（中村）

シウスはいいます。「キリスト教徒よ。あらゆるものから離れて死に、それによつて貧困の精神を体得した人は、みごとに死んでいるのである。」それから禅定を修した人が究極の境地に至つてヴィジョンを見るこゝも東西にみられます。しかしヴィジョンといふのは本物ではない、本当の真理はありふれたところにある。道元禅師の教えの中に大神通と小神通が説かれています。身体の毛穴から水を出すとか火を吹くのは小神通であり、偉大な神通はわれわれが毎日朝起きて息をし、飯を喫し茶を喫し、歩き働き眠るというあたりまえのことだといっておられます。鈴木正三といふ人は「破吉利支丹」の中でキリスト教批判をしていて、明治維新以前に仏教者でキリスト教批判を理論的に行なつた人は少ないので、その中でかれはキリスト教で奇蹟を説くがそれは決して宗教の証しではないといつています。本当の宗教には珍らしいことは何もない。奇蹟などはこの国では狐や狸のやることである。本当の宗教とはあります。ふれたことのうちに神秘を見出すことである。これが偉大な神秘だといふのです。道元禅師のことばに眼横鼻直といふことがあります、眼が横にあつて鼻がまつ直ぐにあるというあたりまえのことをいっています。どうしてそうなっているかということは誰も解らない。偉大な神秘といふのはこういうものをいうのです。西洋またはイスラームの方でも、例えはシェイク・アブドゥラ・アンサールがでて次のようなことばを残しています。「空駆けることが奇蹟ではない。いやしい蝶さえ飛ぶことができる。橋をからず舟によらないで川を渡ることが奇蹟だろうか。鳥や犬でさえよくこれをなす。されど苦惱する人々を救うこと、これが心の強き人の行なうべきことである。」このように奇蹟を排斥することは西洋にも古い時代からあつたわけです。ボエチウス(Boethius, 480—525頃)は「哲学の慰め」の中で狂信的・迷信的なものを排して、この世にあること、その賜物を感謝することを説いています。また「無知の雲」では「これらすべての苦しみの中になりながら、かれは「存在せぬ」ことを望みはしない。なぜならば、そんなことをしたら悪魔の凶器となり神をこばむことになるだろう。ただ存在していること、生きていることを好むのだ。かれが存在することが意義あり賜物であることについて、かれは心からなる十分の感謝を神に捧げるのである。」このイギリスの神秘家は「言及する」とを避けて「暗示する」という傾向をとっています。神は何であるかはいえ

ない。神は何でないかということについて遙かに多くのことを知る」とができる。

こののような立場から道徳が成立しうるかという問題がつぎにでてきますが、西洋の神秘家は人間の本性は善であり清らかであることを認めています。大乗仏教では本来自性清浄ということを申します。人間の内には仮性があり、現に生きている人がどうあろうと、内には清らかな仮性が存在するといふのです。白隱禪師も「衆生本性仮なり」といっておられます。エックハルトは「神の本質は善の衣の下に覆われている」といっています。キリスト教は罪を説くとよくわれますが、しかし神秘家の立場は違います。人間の本性は清浄であるという前提に立っています。もとモーゼとキリスト教の中に二つの対立があつたのです。ペラギウス (*Pelagius*, 345頃—420) と、アウグスチヌス (*Augustinus*, 350—430) の対立です。二人の対論でアウグスチヌスが勝ち、ペラギウスの思想は異端とされてしまったのです。しかしかれの思想は西洋思想史から完全に消されたわけではないのです。アウグスチヌスは罪の意識を強調しましたが、ペラギウスは人間の性は善であるという立場をとつたのです。だから西洋にも仏教的思考がいろいろあるのです。それが異端として弾圧されたわけです。東洋人は異端に対して寛容であります。西洋人は違います。この問題を追究しますと人間に通ずる普遍的理法があるかどうかという問題に突き当たります。仏教ではダルマ (*dharma*) ということをいいます。三世に通じ十方に行きわれるダルマがあるはずだと考えます。ところがキリスト教の考え方には多くの学者の説くようにキリストに始まるのです。それ以外の宗教は場合によつては禁止されるわけです。この考え方方はカソリックやプロテstantの学者の解釈を通じて伝えられてきています。初期のキリスト教にはもっと違った思想がいくつもありました。特にアレキサン드리アの教父の書いたものを見ると面白いと思います。クレメンス (*Clemens*) とかオリジネス (*Origenes*) など的人はキリストの道はロゴス (*Logos*) にあることを主張しています。ロゴスは何もキリスト教だけに現われるはずのものではないといいます。つまりキリスト以前にキリスト教があったということをいっています。クレメンスは仏陀に言及して、インド人の間では仏陀を信じているものがいるが、その仏陀の教えはロゴスに基づいて現われるというのです。だからキリスト以前に真理を説いた人が多くいる

のであり、最後に「たのがイエスであった」ということになるのです。こんな考え方においては異端というものはなくなります。宗教的真理を説いた人を歴史的人物としてのキリストだけに限る考え方を維持できなくなりましょう。だからさきに挙げた「キリストがたとえこの世に千回現われてこようとも」という表現もでてくるわけです。禅で無功用ということを申しますが、この境地になることだと思います。チベットの詩人ミラレーピ(Milarépa 1040—1123)も「正しさということは信者の直接の目的というよりはむしろ悟りの副産物である」といっています。そこで現実肯定的な考え方がでてくるのです。

禅は絶対者に関するあらゆる分別を排除します。仏は日常生活のありふれたものの中にはひそんでいます。それがあるがままに受け取るのです。禅問答の表わす真理はきわめて簡単自明なものになっています。無門関の中のことばに、「はつきりしたことがうつかりされるもの。あるいは火である。ご飯の火をつけよ。」とあります。これで平常の心つまり平常心が道であるということがいわれているのだと思います。エックハルトは「神が初めに宇宙を創造したというけれど、初めとは何のことだ。初めとは永遠のことだ。この今である。」「こと今」ということだ。「こと今」と「今」ということはそれ自身神なのである。永遠においては昨日も明日もない。そこには現在する今がある。千年前の出来事、千年後の出来事が現在の内にある。」これらの表現は華厳の表現にも通じるものがあります。このような絶対のものは限定することができない。そこでもっとも単純な概念である「有」として規定されます。シャンカラの哲学ではブラフマン(brahman)は有であるといわれます。エックハルトによると「有は神であり、神は有を授ける」と表現されています。だから、シャンカラの有は静止的・普遍的であります。エックハルトの有は永遠の内に生きることでした。神はそれ自身において生きる過程なのです。静止的な有ではない。ところで道元禪師の立場では時と有とを同置するわけです。「時すでにこれ有なり。有はみな時なり」といわれているように、いなるものもその本質においてはその瞬間の時間に外ならないのです。悟りを開くということも時間に外ならないのです。「発心・修行・菩薩・涅槃と現成する、すなわち有なり、時なり。」といふことです。これに相応する思想と

して日本ではハイデッカー（Heidegger, 1889—）をもつてきます。しかしハイデッガーは近代思想のジグザグの思想の過程の中から出てきました。道元禅師は中世の人です。わたくしは中世の世界で対比すべきだと思います。その点でアンゲリウス・シレシウスが適当だと考えます。「世俗の時間の内において永遠性というものを経験することができる。わざらいなしにわずらい、その人にとって昨日は今日の如くであり、今日は明日と同じになる。あらゆる事物にひとしく尊ぶ人は常に時間の中に帰る。久しい永遠の中の欲するがままの状態の中に入るのである。永遠は時間であり。時間は永遠である。われわれが両者を別のものとするのないならば。」このように歴史的・社会的なバック・グラウンドもよく似ています。だから道元禅師はむしろシレシウスなどに対比すべきだと思います。もちろんシレシウスの思想は異端的であります。破門はされませんでしたが明らかに異端思想といえるでしょう。西洋思想史の中にはこのようなものは非常に少ないのです。

本日は全く要点的なことだけをボツンボツンと申しまして甚だお聞きづらかったと思います。わたくしの申し上げたい趣旨は、禅といえども人間の産み出した宗教文化であり、これは必ず人類に普遍的なものをもつてているに違いないということです。その意味で、外の文化的伝統の中に対応するを取り出してみることが必要ではないかと思うものであります。しかし、一方では禅は決して外の文化圏には見られないものでもあります。これは東洋の産み出しだ独自のものであります。その独自なものはどこに求めることができるか、それは西洋なり西アジアの相似た思想と比べてみるとあります。その違いを明確にすることによって禅の独自性というものが明らかになるだろうと考えます。本日は違いについては詳しく申し上げられませんでした。一つにはわたくしが十分理解していないためにそれについて申すことをはばかたわけです。相應するとか似ているということはすぐいえます。どこが違うかということになるとかなり参究する必要があります。そこでその仕事のことは将来皆様に一つお願いいいたしたいと思います。これをもちまして本日の講演を終えることにいたします。長時間ご静聴有難うございました。